

ペシャワール会名古屋の五井泰弘会長に聞く

「山ほどの苦難に立ち向かう」中村哲さんの遺志継ぐ 「彼らのため何が一番大切で、どう役に立つのか」

アフガニスタンで医療、農業などに貢献した中村哲医師が武装勢力に襲撃され死亡してから2年半。中村氏を支援するため設立された「ペシャワール会」（本部・福岡市、村上優会長）は現在、どうなっているのか。同会の中でも早くから中村氏を支えてきた「ペシャワール会名古屋」の会長で本部理事でもある五井泰弘氏（75）に会の現状と今後の目標などについて聞いた。

（聞き手は塚本隆編集長）

塚本 パキスタン北部の町、ペシャワールで医療活動を始めた中村さんと名古屋の方々との出会い、名古屋支部設立の経緯を教えてください。

五井会長 名古屋支部は1996年2月に設立されました。全国的にも支部は初めてで、現在も唯一の支部です。その何年か前に名古屋のライオンズクラブのメンバー数人がパキスタンを訪れた際、ペシャワールで医療活動をしていた中村さん一家を紹介され、野戦病院のような施設で頑張る中村さんに驚き、ライオンズのハンセン病委員会として支援を決めて会を立ち上げたのが始まりです。

——中村さんは1984年にキリスト教系の病院から現地に派遣されたそうですが、そもそもなぜパキスタンだったのですか。

五井 中村さんは学生時代に山岳部でパキスタン周辺の山に登り、珍しい蝶にも惹かれ、それが縁で派遣されたのかもしれませんが。そして、国境を越えてアフガニスタン（以下、アフガン）の人々のための農業支援などに広がっていったのです。

——名古屋支部の現在の会員数や支援活動についてお聞きしたい。

五井 今年3月現在で、全国の会員は約16,000人、支援者を含めると約25,000人で、中村さんが亡くなってからも会員は増えています。名古屋の会員は東海3県で1,200人ほど、中部10県では2,000人ほどです。

活動の一つは、ペシャワールに1998年に完成したPMS（ピースジャパン・メディカルサービス）病院への支援があります。ここを基地にパキスタンとアフガンの山岳地に複数の診療所も設置し、ハンセン病や貧困層への診療を充実させました。診療所の一つは名古屋が設置しました。

——中村さんは井戸の掘削から、農業用水路建設へ活動を広げました。

五井 国家的な大事業ですが、中村さんを中心に現地スタッフや我々ボランティアが困難に直面しながら汗をかいて道を切り開いてきたと言えるのではないのでしょうか。

——会への支援の輪が広がったのは何かきっかけがあったのですか。

五井 2001年9月の米国同時多発テロを受けて、米軍のアフガン空爆が始まりました。翌10月、中村さんが名古屋で講演することになっていて、ペシャワール会が現地で食料を配給しているとテレビで盛んに報道され、ペシャワール会が全国で知られるようになりました。

——中村さんの講演はどうでしたか。

五井 当時、私は事務局長として300人ほどが入る会場を確保して準備をしていたところ、テレビを見た多くの人が全国から駆け付けてくれて、おそらく1,000人ほどに膨れ上がりました。驚きました。会場に入れない人が大勢いて、会場に到着した中村さんに階段で、外にいた人たちに急遽、話をしてもらいました。